

第一次大極殿院回廊の調査

— 第 431・432・436・437・438 次

1 はじめに

第一次大極殿院の発掘調査は、1959年の第2次調査より開始し、これまで奈良時代前半から平安時代初期にかけて、大きく3時期の遺構変遷を明らかにしている。区画の東半分を中心とした、1979年までの調査成果については、既に『平城報告Ⅺ』として報告しているが、その後も西面および南面回廊を中心に継続して調査をおこなっている。

2008年度は、回廊の全貌を明らかとすることを目的に、南面・西面回廊の未発掘部分を中心とした調査を計

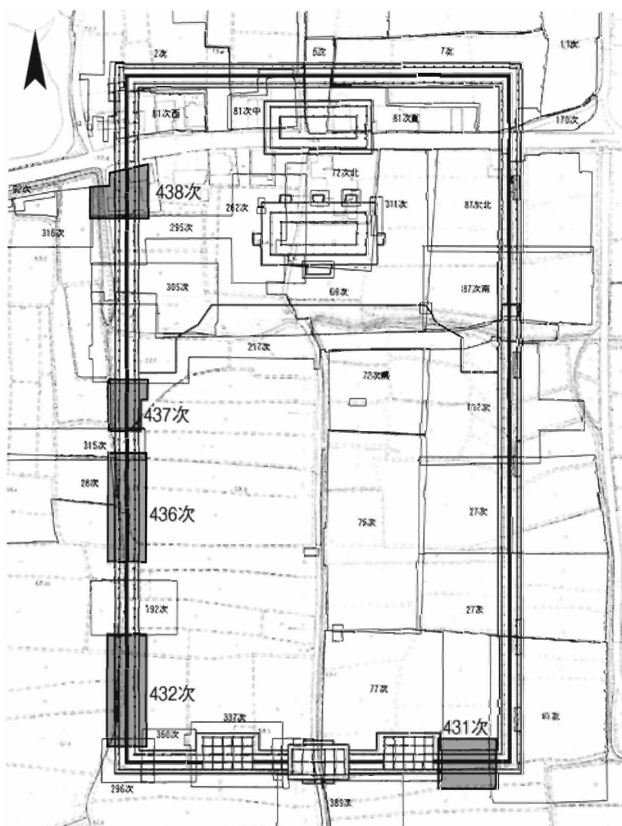


図129 第431・432・436・437・438次調査区位置図

表15 各調査の発掘面積と調査期間

調査次数	発掘面積㎡	東西m	南北m	調査開始日	調査終了日
431	632.5	27.5	26	08.04.01	08.06.26
432	936	18	52	08.04.12	08.10.22
436	879.5	17.5	50.4	08.06.26	08.11.18
437	397	18	24	08.07.01	08.11.26
438	547	27	25	08.09.24	08.12.22

画した。調査区は、南面回廊の東部に第431次調査、西面回廊の南から第432・436・437・438次調査の合計5つを設定した(図129)。それぞれの調査面積と調査期間は表15のとおりである。

2 既往の成果と遺構変遷

これまでの成果により、第一次大極殿院地区の遺構はⅠ～Ⅲ期の大きく3時期に区分される。Ⅰ期はさらに4時期に分けられる。以下、各時期について説明する。

Ⅰ期：平城宮造営当初より、恭仁宮から還都するまで。
奈良時代前半。

Ⅰ-1期…平城宮造営当初。区画の周囲を複廊の築地回廊で囲み、区画の内部は、北約3分の1を高くし、段差部分に磚積擁壁を築く。壇上は区画の中軸上に大極殿と後殿を南北に並べて配置する。

Ⅰ-2期…南面回廊を改修し、南門の東西に楼閣を増築する。

Ⅰ-3期…恭仁宮遷都。大極殿と東面・西面回廊を解体し、恭仁宮に移築する。東西両面は掘立柱塀を新たに造る。

Ⅰ-4期…恭仁宮より還都。掘立柱塀を解体し、東面・西面回廊を再建する。

Ⅱ期：奈良時代後半。区画の南北幅を狭め、内裏と同規模の区画とし、周囲は複廊の築地回廊で区画する。東西の回廊はⅠ期の回廊の基壇を踏襲する。区画の内部は、中央に段差を設け、壇上には多数の掘立柱建物を建てる。称徳天皇の西宮に比定される。

Ⅲ期：平安時代初期。Ⅱ期の区画を踏襲する。区画施設は基壇幅を狭め、築地塀に改める。区画内の壇上部分は、新たに建物群を造営する。平城太上天皇の西宮に比定される。

今回の調査では、Ⅰ期の南面・西面築地回廊、西面掘立柱塀、Ⅱ期西面築地回廊、Ⅲ期西面築地塀の検出が予想された。加えて、第436次調査区は、Ⅱ・Ⅲ期の区画施設の西南隅部分にあたり、それにとまなう遺構の検出が、また、第437次および第438次調査区は、東対称部分でⅢ期の区画内部の遺構が確認されており、それらに対応する遺構の検出が期待された。以下、南面回廊部分と西面回廊部分にわけて報告する。(大林 潤)

3 南面回廊の調査 (第431次)

調査地の地形と基本層序

第431次調査地は南面築地回廊の東端付近にあたる。この辺りは第一次大極殿院地区の中でも低所で、第一次大極殿が位置した台地よりは一段低い地形面にあたる。

宮の造営以前には、有機物を含んだ黒色粘土が堆積していた。調査地内でベースをなす土層はこの黒色粘土で、その自然層の直上に淡灰色土（造営時の整地層：層厚約5～10cm）を敷いている。回廊基壇の地業はこの上面から掘り込んでおり、この上に版築層を積み上げて基壇を築成している。回廊基壇の北側（大極殿院の広場）では、この淡灰色土の上に淡灰色砂礫（下層礫敷SH6603A）、灰白色砂質土・橙褐色砂（中層礫敷相当層SH6603B）、灰色砂礫（上層礫敷SH6603C）が積み重なり、灰色砂礫は瓦溜まりが覆う。回廊の基壇には削平ののち赤褐色礫層が敷かれる。この礫層は大極殿院の灰色砂礫・瓦溜まりをも部分的に覆うが、その広がり回廊基壇の範囲にほぼ限られ、瓦器片および宋銭を含む。これより上層は、下位から順に灰黄褐色土、灰褐色土（床土）、耕作土、整備盛土となる。一方、基壇の南側は水田面が一段低くなるため、床土直下が朝堂院の礫敷（混礫褐色土）となる。遺構検出面は、基壇の北側で灰色砂礫上面、基壇上で赤褐色礫層の直下、基壇の南側で混礫褐色土の上面である。

検出遺構の概要

I-1期

南面築地回廊 SC5600 南面築地回廊の総長は約180mであるが、このうち未調査地として残っていたのは今次調査の対象地（東西約23.0m）であった。今次調査では築地回廊の礎石痕跡を新たに5間分検出し、南面築地回廊の全体を完掘した。

南面築地回廊の基壇は版築工法で築かれ、西楼（SB17800）以東では掘込地業を施していたことが判明している。今次調査でも掘込地業と版築層とを確認し、従来の知見どおりであることを確認した。掘込地業の深さは約30cmで混礫土を充填し、その上位に灰褐色／橙色の版築層を交互に積み重ねて基壇を築成している。版築層は礫を含む橙色土と灰褐色土との互層からなり、最大で約30cmを残す。なお、この掘込地業は回廊心部分の約1.7m幅を掘り残しており、東面築地回廊 SC5500と

同じ工法によったことが判明した。

築地回廊の基壇は、後世の水田の造成によって南側が大きく削りとられていた。このため、築地回廊南側の礎石抜取穴のうち2基は完全に失われ、3基は部分的に残るのみであった。一方、北側の礎石抜取穴は根石とともに比較的よく残っており、その間隔から築地回廊の柱間を推定することが可能であった。すなわち、桁行は約4.6m（15.5尺）等間、梁行は約7.1m（24.0尺）と復元され、南面築地回廊におけるこれまでの調査成果と一致する。これに対し、築地そのものはその痕跡をまったくとどめておらず、削平により失われたとみられる。

東西溝 SD7813A 南面築地回廊 SC5600 の下層北雨落溝で、築地回廊創建時のもの。西排水溝の壁面（第77次調査区東壁に同じ）で確認した（図131）が、平面的な検出はおこなっていない。土層観察では拳大の亜角礫を敷きつめたもので、幅は約70cmである。

東西溝 SD5557 雨落溝 SD7813A のすぐ南側に設置された東西溝で、中層礫敷に対比できる暗灰褐色土が覆う。今次調査の西排水溝東壁（第77次調査区の東壁）で再確認した（図131）。溝の深さは約50cmで、下底部は黒色粘土に達している。溝の内部には拳大程度の円礫を詰め込んで排水機能をもたせている。回廊南辺付近の排水にかかわる溝とみられる。

東西溝 SD5565 築地回廊基壇の南側に設置された東西溝で、SD5557と同様に拳大程度の礫を詰め込んだもの。朝堂院の礫敷 SX19220 が覆うため検出範囲は一部にとどまるが、東排水溝（第41次調査区西排水溝）および西排水溝（第77次調査区東排水溝）で層位的に確認している。SD5557と同じく、溝の下底は黒色粘土に達している。回廊南縁の排水にかかわるものであろう。

大極殿院礫敷 SH6603A 築地回廊の北側に広がるとみられる淡灰色の混礫層で、西排水溝の壁面で層位的に確認したが、平面的には検出していない。層厚は約10～15cmで、拳大未満の礫を含む。回廊創建直前に敷かれた整地層（淡灰色土）を直接覆っている。

I-2期

大極殿広場礫敷 SH6603B 先にみた SH6603A や東西溝 SD5565 を覆う土層で、灰白色砂質土・橙褐色砂および褐灰色砂礫層（中層礫敷相当層）からなる。層厚は合わせて10cm程度。北壁の土層観察によれば、これらの土層

は調査区の北西隅から東へ約11mで途切れ、これより東には広がらない。褐灰色砂礫層は拳大礫を含む人為層で、第77次調査の中層礫敷に相当する。一方、褐灰色砂礫層の下位にある灰白色砂質土・橙褐色砂は粒の揃った礫を敷き詰めた状況になく、回廊基壇近くに堆積した砂層とみられる。

東西溝 SD7855A 回廊基壇の北縁に位置する東西方向の溝で、西排水溝の壁面でのみ確認(図131)。中層礫敷 SH6603B の敷設に先立ち、基壇外装を抜きとった際の溝とみる。

溝 SD19215 調査区北西隅・SH6603A の上面で検出した素掘溝で、上にみた礫敷 SH6603B が覆う。検出部分はおおむね北方から流れてきた溝が東へと曲折する部分にあたり、南面築地回廊 SC5600 に阻まれて東折したようにみえる。溝の埋土は白色砂で、水流が運んだものらしい。I-2期における回廊周辺の排水にかかわるものか。この溝の続きは調査地北側の第77次調査拡張区でも検出している。

I-4期

東西溝 SD7813B 南面築地回廊の北雨落溝で、東楼増設(I-2期)以降とされる。回廊の解体まで機能したもので、回廊廃絶時の瓦層が直接この溝を覆う。溝の幅は約50cmで、拳大程度の円礫を詰めて散水状とする。溝の北側は見切石を境とし、大極殿院の礫敷に接している。溝の南側には基壇外装の抜取溝 SD7855B があり、両者は約50cmを隔てて平行している。

大極殿広場礫敷 SH6603C 築地回廊の基壇北側に広がる灰色砂礫層で、遷都後に敷設されたとされる(上層礫敷)。層厚は約5cmで、礫は直径1~3cm程度。先にみた SH6603B より上位だが、後述する瓦溜まりがこれを覆う。

瓦溜まり SX19221 大極殿院広場の瓦溜まりで、先にみた礫敷 SH6603C の上位に堆積する。層厚は約5cmで、南面回廊の北雨落溝 SD7813B を直接覆う。南面築地回廊の解体時のものであろう。

東西溝 SD7855B 回廊基壇の北縁で検出した東西方向の溝で、これより南側が回廊の基壇である。幅70cm、現存する深さは10cm未満。埋土中に凝灰岩片は含まれないが、その位置から基壇外装の抜取溝であろう。

礫敷 SX19220 回廊基壇の南側(朝堂院広場)に敷いた礫

敷で、拳大礫を多く含む褐色土である。上にみた大極殿院広場の礫敷 SH6603C より約30cm低い。回廊廃絶時の瓦で覆われる部分があり、このことからI-4期以前であるが、敷設の時期は明らかにしがたい。第389次の SX18795 や第376次の SX18650 に同じか。

東西溝 SD19217 回廊の南縁で検出した東西溝で、これより北側が回廊の基壇となる。幅75cm、現存する深さは約30cm。埋土中に凝灰岩片は含まないが、その位置から基壇外装の抜取溝とみられる。

土坑 SK19218 調査区西南隅で検出した土坑で、深さは約20cmである。埋土には瓦を多く含み、回廊廃絶時のものとみられる。

II期以降

礫敷 SX19223 I期築地回廊削平後に基壇を覆う赤褐色の礫層で、チャートの垂角礫からなる。層厚は5~10cmで、礫層中には宋銭や瓦器片を含み、上面では耕作溝を検出した。当初、奈良時代後半に敷かれたいわゆる第II期礫敷(『平城報告XI』P.36)の可能性を考えたが、水田の造成以後に敷かれたことが層位的に明らかとなった。すなわち、基壇の南側が削平されて以後に堆積した土層が、この赤褐色礫層に覆われていると判明し、SX19223が奈良時代後半のものである可能性は否定された。

出土遺物

土器 土器の出土量はきわめて少なく、整理箱で5箱を数えるのみである。

瓦磚類 礫敷をおおう瓦溜まりなどから多数出土しており、南面築地回廊に葺かれていた瓦と推測される。瓦は軒丸瓦 6284A・C と軒平瓦 6664A、6668A からなり、第一次大極殿院回廊創建時の瓦である(表16)。(森川 実)

表16 第431次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6284	A	3	6641	E	1	面戸瓦	9
	C	3	6664	C	2	割面戸瓦?	1
	F	1		K	1		
	?	2		?	2		
	型式不明	25	6668	A	2		
				型式不明	5		
軒丸瓦計		34	軒平瓦計		13	道具瓦計	10
		丸瓦			平瓦		凝灰岩
重量		820kg			412.6kg	2.0kg	0.1kg
点数		1377			9845	1	

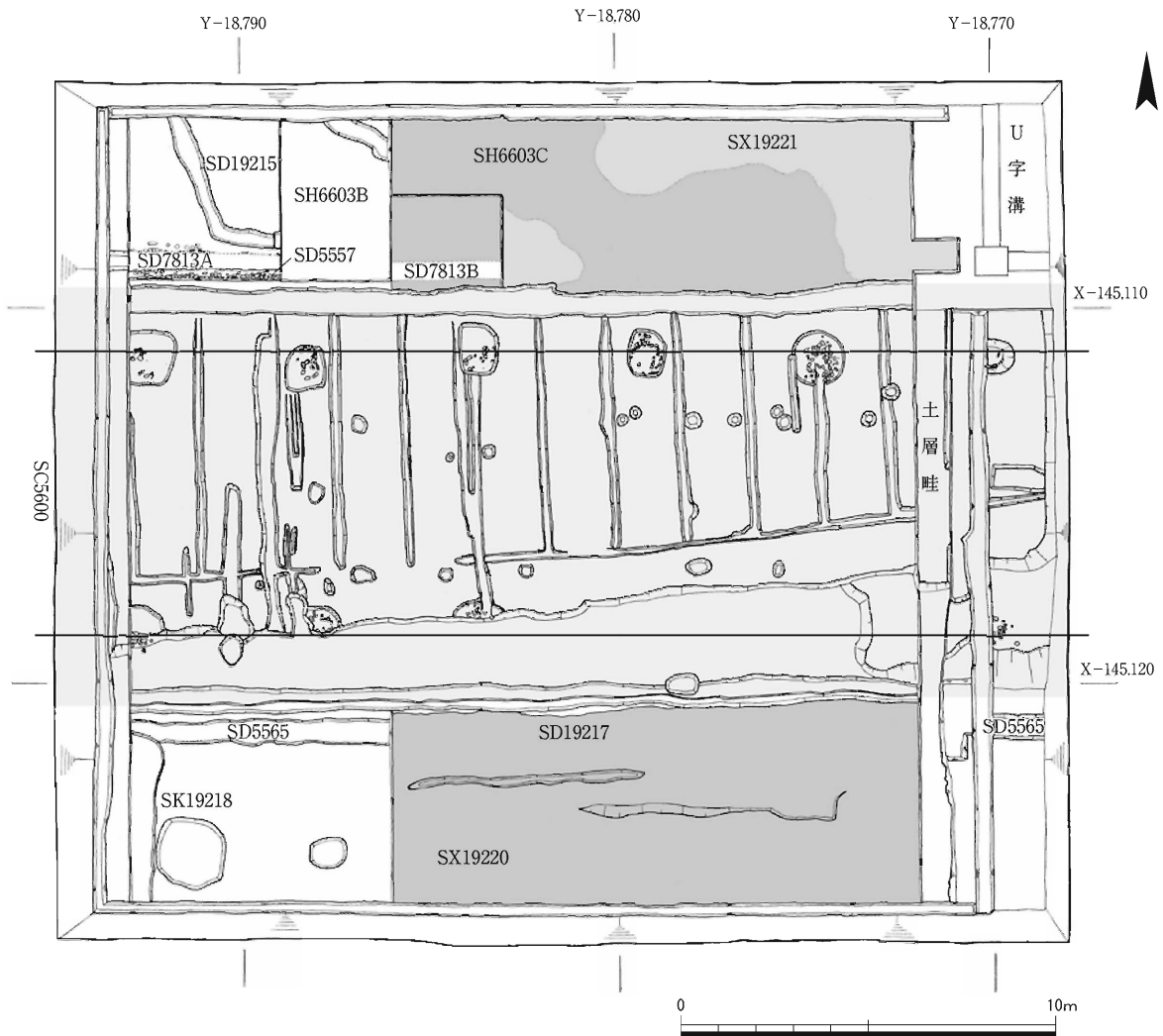


図 130 第 431 次調査遺構平面図 1 : 200

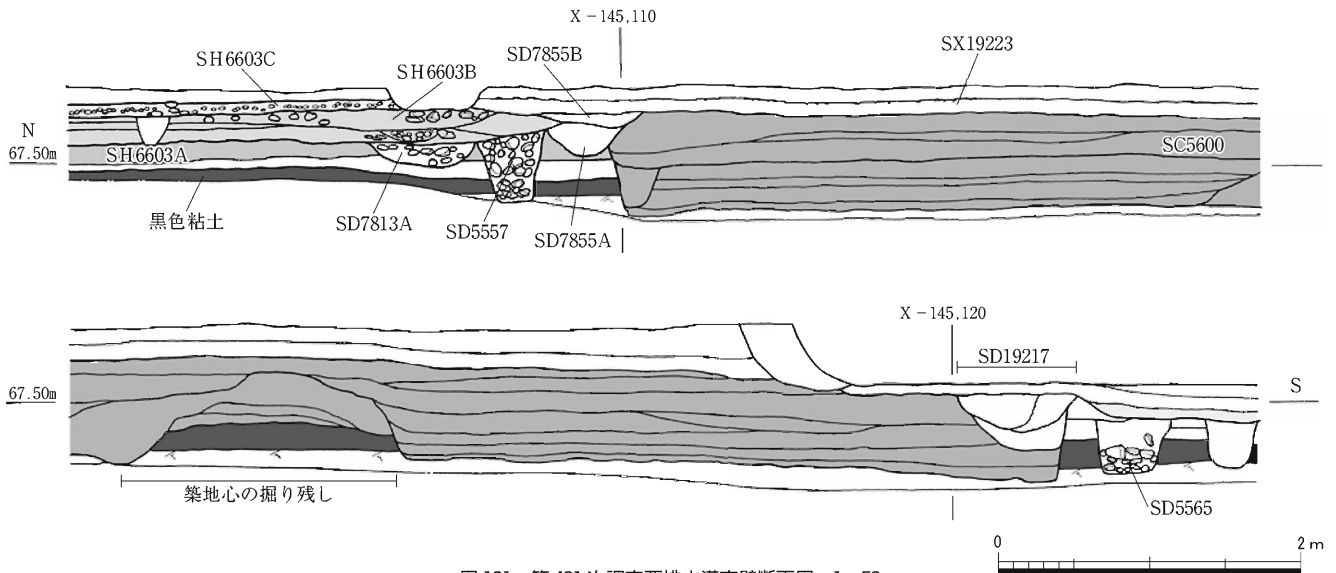


図 131 第 431 次調査西排水溝東壁断面図 1 : 50

4 西面回廊の調査 (第432・436・437・438次)

調査地の地形と基本層序

第一次大極殿院地区は、平城山丘陵より南に延びる尾根筋に位置し、北から南へなだらかに傾斜する。調査前の西面回廊付近の地形は、第432次調査より第437次調査までの南半部分は区画の内外ともほぼ平坦であるが、それより北側では大きな段差が認められる。これは、平城宮造営時に大きく積まれた整地土と、後世にさらに積まれた盛土によるものであることが判明している（「第295次調査」『年報1998-Ⅲ』など）。

基本層序は、おおむね表土（第432次調査区では宮跡整備事業による整備土、第438次調査区では既存住宅撤去後の造成土を含む）・旧耕作土・旧床土・遺物包含層・整地土・地山となる。回廊基壇部分では、整地土の上面に版築状に積まれた基壇土が認められ、第432次調査区の南半では、さらに赤褐色混礫土（SX19223）が基壇土の上に広がる。回廊東側は整地土上に後述する3層の礫敷舗装面があり、回廊の西辺より西は、後世に大きく削り取られている。遺構は、整地土上面、もしくは基壇土上面で検出した（第438次調査では、遺物包含層である褐色土上面で、中世以降の铸造遺構として、炉跡2基と東西溝1条を検出している）。各調査における回廊基壇土・整地土・地山の上面の標高を表17に示す。

検出遺構の概要

西面回廊地区で検出した遺構は、回廊、門、塀、溝、広場、礫敷舗装、土坑、井戸などである。以下、検出遺構を順に説明する。

表17 各調査における地山高と整地土上面の標高

	X座標	Y座標	地山高m	整地土上面高m	基壇土検出高m	調査次数
1	-145,091.2	-18,943.0	67.3	-	-	432
2	-145,086.0	-18,942.2	67.3	-	-	432
3	-145,017.8	-18,943.5	67.4	-	-	436
4	-145,003.7	-18,936.0	67.4	-	-	436
5	-144,994.8	-18,942.8	67.9	68.6	68.9	436
6	-144,981.7	-18,942.0	68.0	68.7	69.3	437
7	-144,959.8	-18,943.3	68.5	69.1	69.8	437
8	-144,945.1	-18,942.0	68.6	69.5	70.1	437
9	-144,939.6	-18,942.0	-	69.7	70.3	437
10	-144,863.0	-18,943.0	-	71.2	71.7	438
11	-144,859.0	-18,944.5	-	71.2	71.4	438
12	-144,854.6	-18,944.5	-	71.2	71.4	438
13	-144,850.0	-18,939.0	-	71.3	71.7	438
14	-144,846.4	-18,944.3	-	71.1	71.3	438

I-1期

西面築地回廊 SC13400 第一次大極殿院の西を限る築地回廊。今回の調査では、築地塀本体や側柱の礎石痕跡は確認できなかったが、回廊基壇版築土と東雨落溝を部分的に検出した。基壇西辺は後世に大きく削られており、基壇外装の痕跡や西側の雨落溝は完全に失われている。

基壇版築土は、地山上に積まれた整地土に直接造成される。今回の調査範囲では掘込地業は確認できなかった。版築は、粘質土や砂質土を交互に積み上げ、礫や粘土ブロックが混じる。基壇土は、第432次では西半が削平を受けており、第436次では30～35cm、第437次では40～50cm、第438次では約60cm残存する。

後述するSD19225が基壇外装東側の地覆抜取溝とすると、この溝の心と西面築地回廊南端の第296次調査より導かれる築地回廊想定心との距離は約5.6mとなり、基壇の幅は約11.2m（37尺）に復原される。

東雨落溝 SD13401 SC13400の東雨落溝。溝の深さは5～10cm。東肩には径10cm程度の見切り石を据え、その内側にはひとまわり小さな石で、見切り石の下部をおさえる。この見切り石は礫敷 SH6603・SX17865の西端を兼ねる。溝底には礫を敷き込むが、場所により礫の大きさが異なる。432・436次では径2cmの小礫を敷き、437・438次では径2～7cmとなる。

下層礫敷面 SX17865・SH6603A SX17865は、磚積擁壁壇上の礫敷舗装面。整地土の上面で、前述の見切り石より東に径3～5cmの礫を敷く。SH6603Aは磚積擁壁より南面築地回廊までの内庭広場。同じく見切り石より東の整地土上に径1～7cmの礫を敷く。

I-2期

南北溝 SD17940 第432次調査区の南部で検出した南北方向の素掘溝で、第296次では築地回廊の東雨落溝としていたもの。北でやや東へ振れている。この南北溝は現行水路のため北端を確認できなかったが、東面回廊の対称位置で検出した溝 SD5588と同様に、内庭広場内の東西溝 SD5590Aに接続すると考えられる（『平城報告Ⅺ』）。南は、第296次調査で検出した暗渠 SD17963に流れ、回廊の外に排水される。溝の埋土には瓦を多く含む。今回の範囲では、削平により内庭礫敷との重複関係が明確ではないが、SD5588およびSD5590Aと同時期とすればI-2期の遺構である。

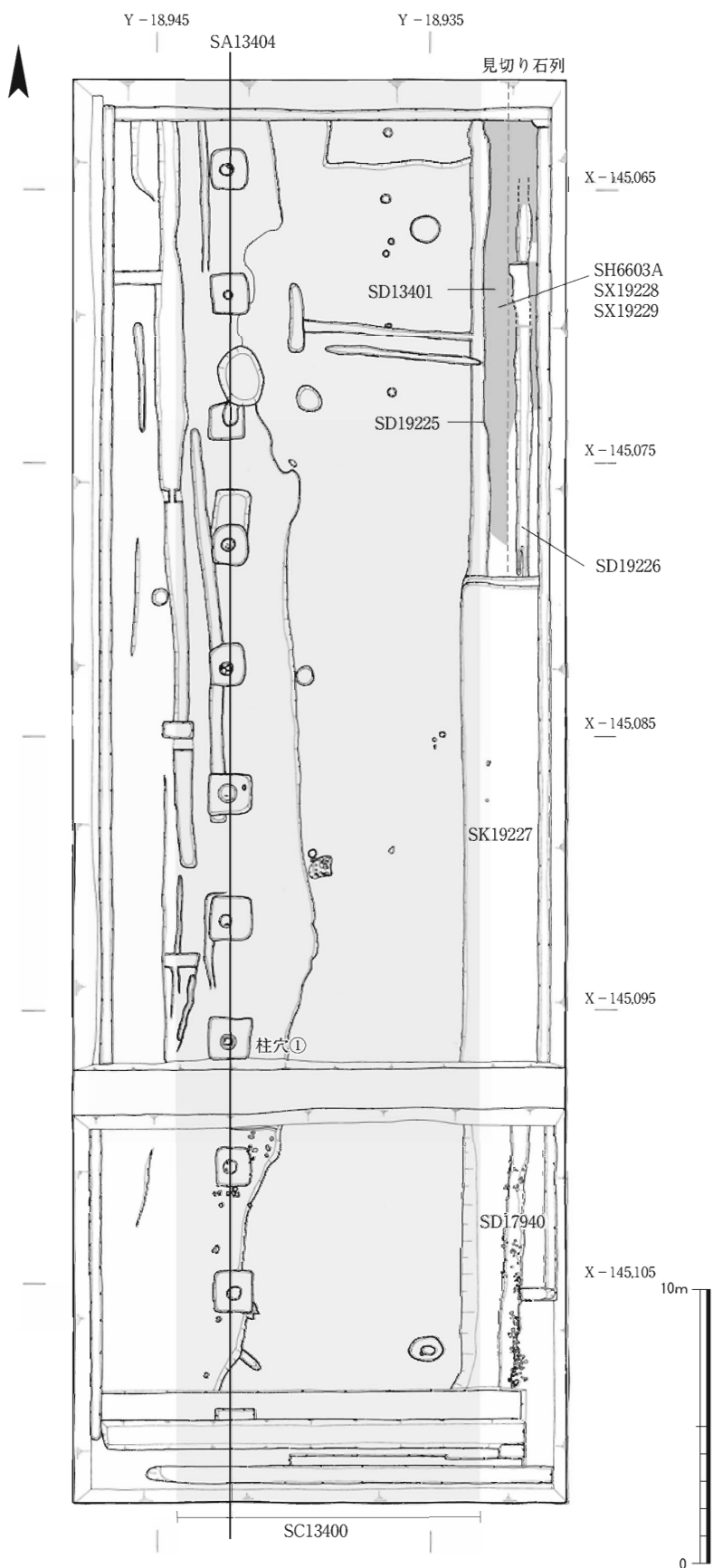


図 132 第 432 次調査遺構平面図 1 : 250



図 133 東雨落溝 SD13401 を覆う瓦溜まり (南東から)



図 134 東雨落溝 SD13401 および SD19225 (北西から)



図 135 SA1340 (北から)

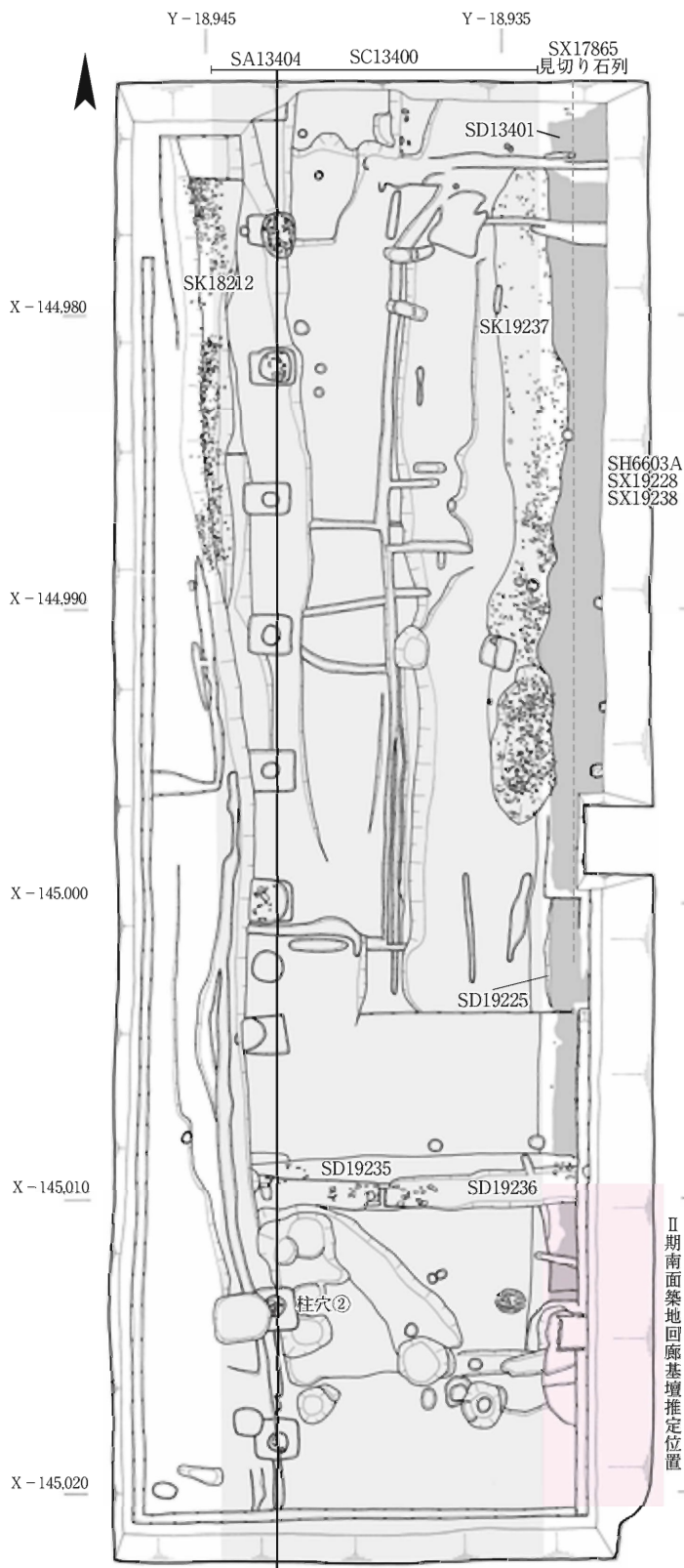


図 136 第 436 次調査遺構平面図 1 : 250



図 137 SD13401 (南から)



図 138 SD13401 と SK19237 (北西から)



図 139 SD19235 と SD19236 (北西から)

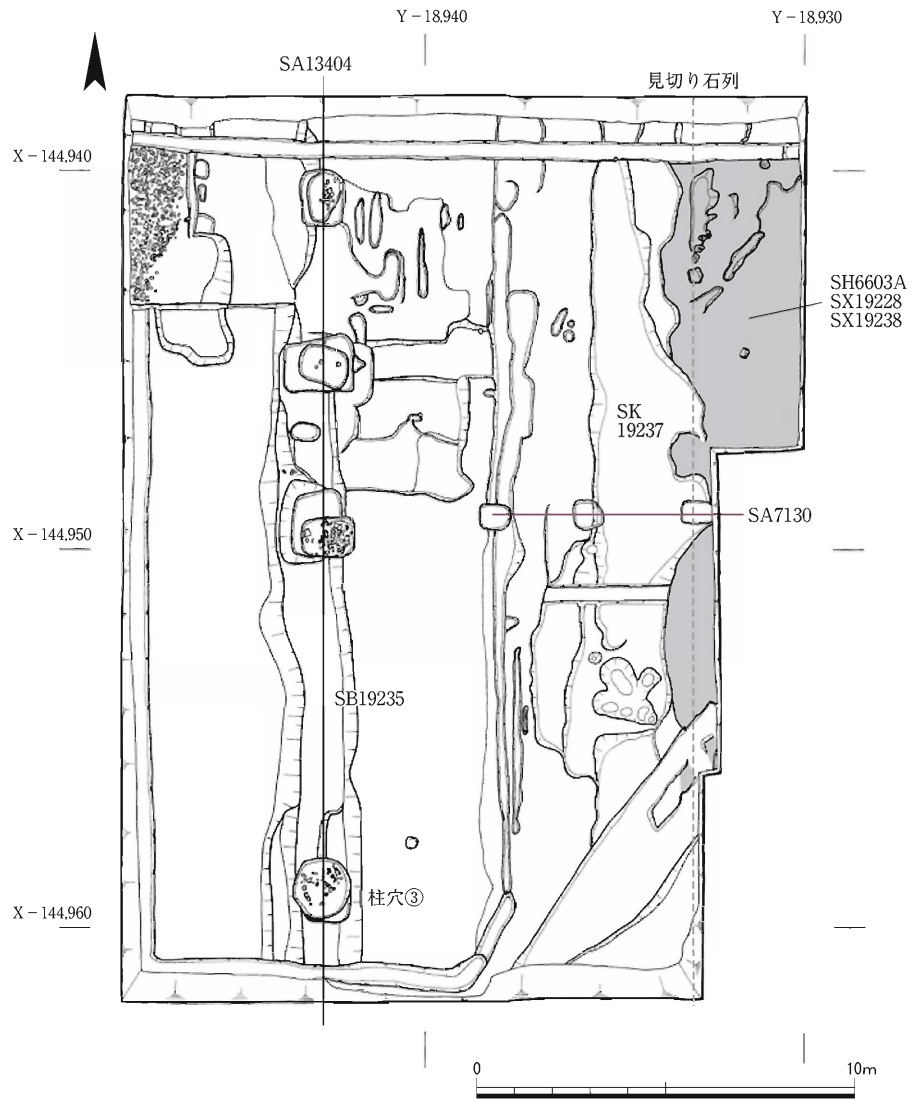


図 140 第 437 次調査遺構平面図 1 : 200



図 141 SD13401・SH6603A 平面図 1 : 20

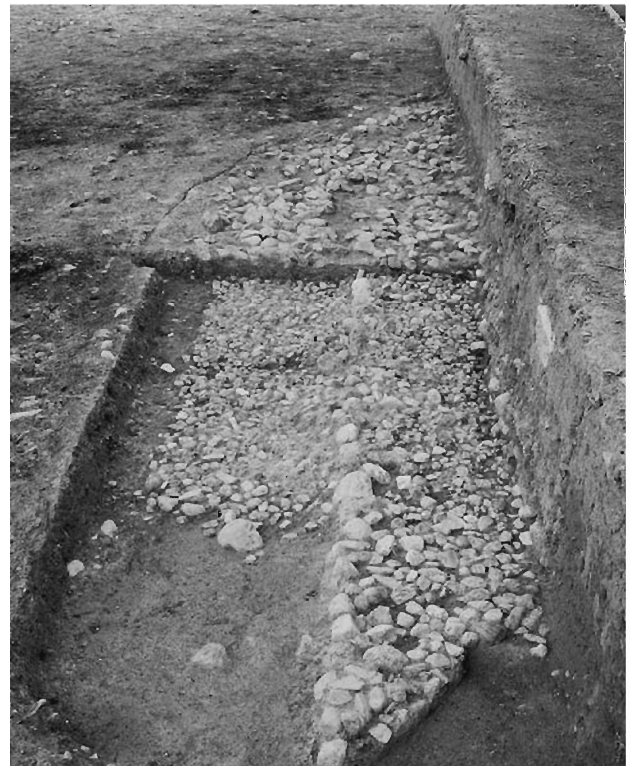


図 142 SD13401・SH6603A (南から)

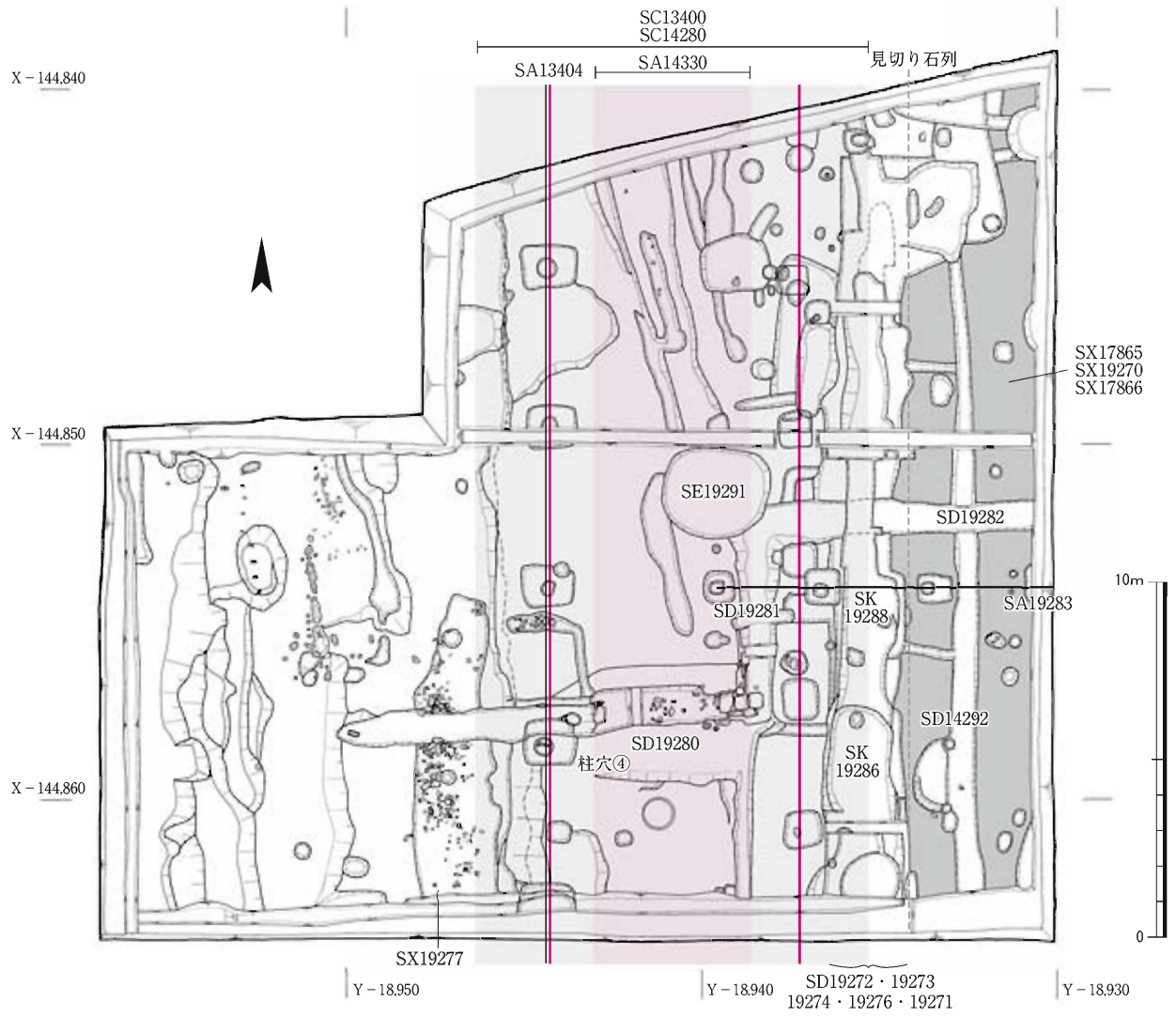


図 143 第 438 次調査遺構平面図 1 : 200

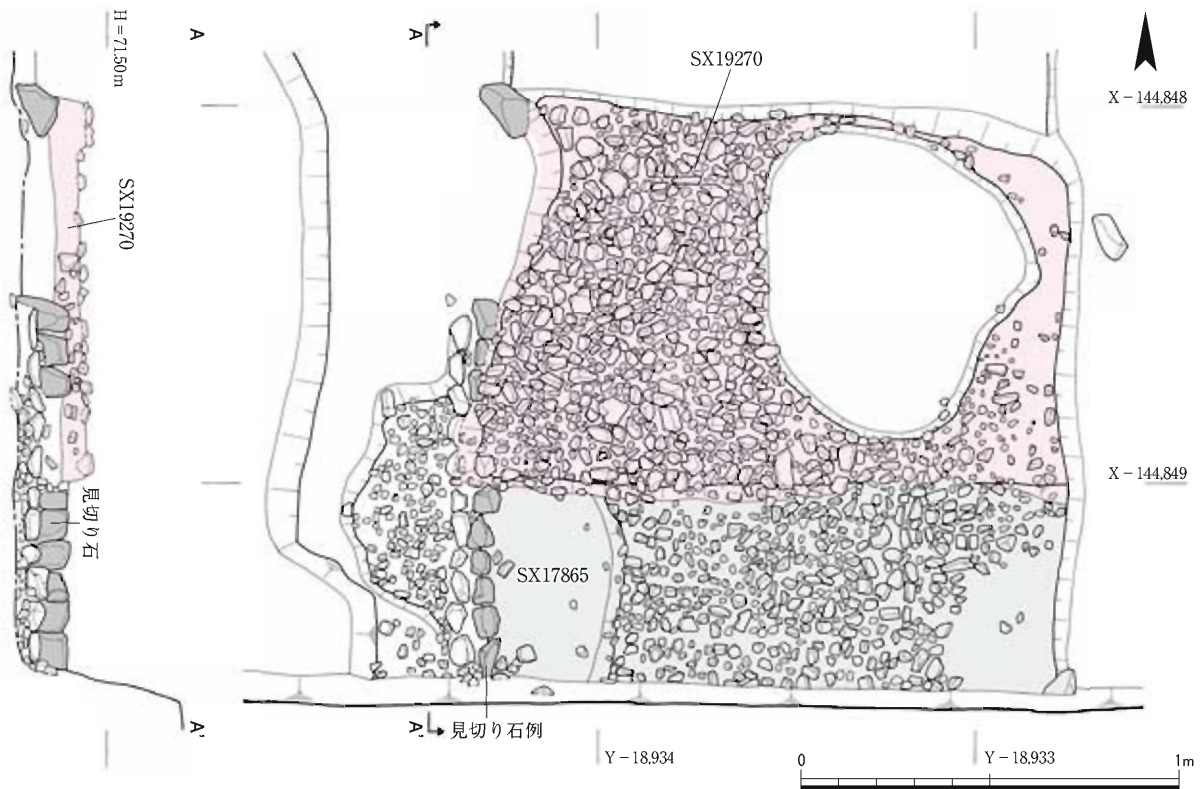


図 144 I 期壇上礫敷 SX17865・SX19270 平面図および見切り石列立面図 1 : 20

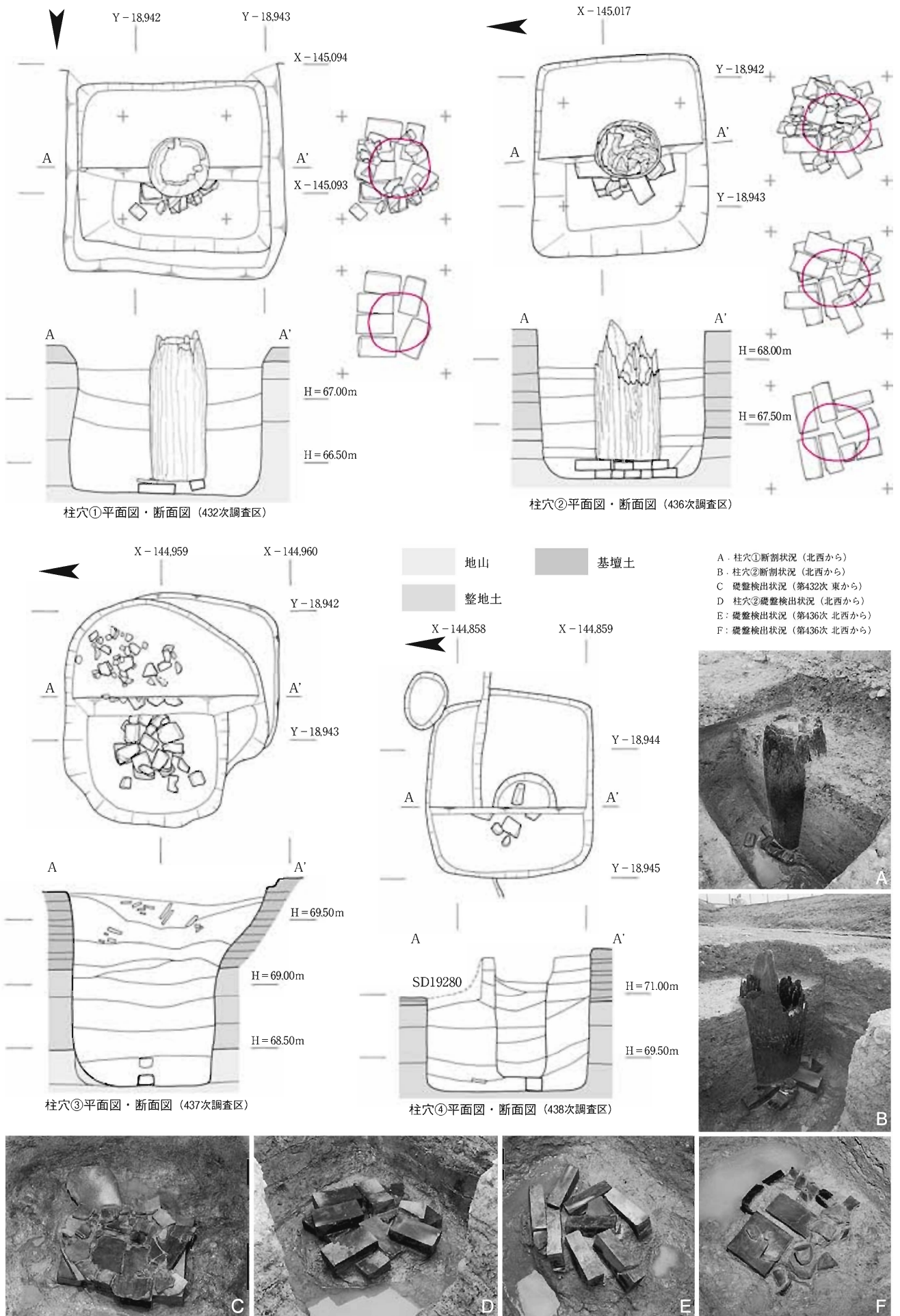


図 145 I-3期西面掘立柱塼 SA13404 柱穴平面図・断面図と礎盤の諸相 1:40

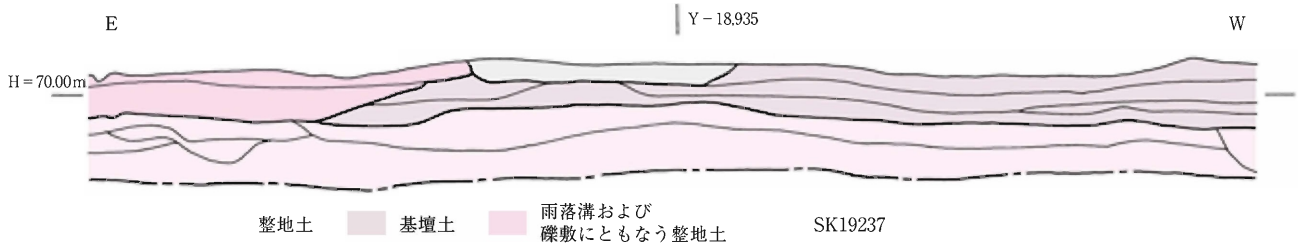


図 146 第 437 次調査区北辺断面図東半 1 : 50

I-3 期

西面掘立柱塀 SA13404 南北方向の掘立柱塀。西面築地回廊 SC13400 の西側柱列の推定位置と柱筋を揃える。今回の調査では合計 31 基の柱穴を確認しており、柱間は 4.6 m (15.5 尺) である。11 基の柱穴で断割調査をおこない、そのすべてで礎盤として磚を据えた状況を確認した。これまでの調査成果を加味すると、東面の掘立柱塀 SA3777 とは対照的に、西側の掘立柱塀ではすべての柱穴に礎盤を用いていると考えられよう。磚の配置に規則性はなく (図 145)、なかには方磚や石材を用いるなど多様性が認められる。また、4 基の柱穴には柱根が遺存していた。樹種はすべてコウヤマキで、柱の直径はもともと太いもので約 48cm。柱は礎盤の磚の上に立てるが、柱底面と磚との間に調整のため多数の瓦片を楔状に差し込んでいる。なお、礎盤の磚上面の標高は、第 438 次調査区では 70.35 m (図 145 柱穴④)、第 437 次調査区で 68.30 m、第 436 次調査区北では 67.95 m、同南では 67.22 m (図 145 柱穴②)、第 432 次調査区南では 66.36 m (図 145 柱穴①) である。II 期の SD19235・SD19236、III 期の SD19280 と重複し、いずれよりも古い。

門 SB19255 西面掘立柱塀 SA13404 に開く門。第 437 次調査区の南端の柱穴と南からふたつめの柱穴との柱間寸法が 9.2 m (31 尺) となっており、柱をひとつ省略することで門を設けているようである。西面掘立柱塀 SA13404 の門は第 295 次調査でも確認されており、これと同様の構造であろう。なお、東面掘立柱塀 SA3777 でも門が対称の位置に設けられている (『平城報告 XI』)。

礫敷 SX19228・SX19270 SX19228 は SH6603A の、SX19270 は SX17865 の上面に敷かれた礫敷面。SD13401 の溝内と見切り石周辺を厚さ 3～7 cm の土で埋め立て

た後、径 4～15cm の礫を敷く。礫は SD13401 周辺に敷いており、東にいくほどまばらになる。SD13401 の埋め立てを主目的として敷かれた可能性が高い。第 432・436 次調査では、SD13401 の内部にのみ礫が残存するが、第 437・438 次調査では、見切り石上面を覆い東に広がる。回廊存続時には雨落溝を埋め立てる必要はなく、後述の SX17866 に覆われているため、I-3 期の遺構とした。

I 期廃絶時

南北溝 SD19225 第 432・436 次調査区で検出した幅約 45cm の南北溝。東雨落溝 SD13401 に西接しその西半部分を破壊している。埋土中に凝灰岩片は含まれていないが、東雨落溝との位置関係から西面築地回廊の基壇外装の抜取溝の可能性ある。土坑 SK19237 より古い。

南北溝 SD19271 第 438 次調査で検出した南北溝。礫敷 SX19270 を掘り込む。幅約 1 m で、南北は調査区の外に続く。回廊基壇外装の抜取痕跡あるいは I-4 期の回廊東雨落溝の可能性ある。

II 期

礫敷 SX19229・SX19238・SX17866 I 期の礫敷面 SX19228・SX19270 の上面を覆う礫敷面。最大 7cm の土を積み、その上に径 1～4 cm の小礫を敷く。SX19229 は II 期南面回廊より南 (第 432 次)、SX19238 は南面回廊より北で石積擁壁より南 (第 436・437 次)、SX17866 は石積擁壁上段の殿舎地区内の舗装であり、一連の遺構ではないが、同時期のものである。第 295 次調査では、この礫敷面で II 期の建物遺構を検出しており、II 期の造営時にはすでに敷かれていたと考えられる。

西面築地回廊 SC14280 I 期築地回廊基壇を踏襲して造られた築地回廊。基壇外装や築地本体、雨落溝は残存しないが、第 438 次調査区で東西の側柱の礎石据付痕跡を、東柱列で 6 基、西柱列で 1 基検出した。礎石据付穴は最大で深さ約 30cm が残存するが、礎石は既に抜き取られている。柱間寸法は、梁行方向は東西側柱間で約 7.2m (24 尺)、桁行方向は約 3.9m (13 尺)。

暗渠 SD19235 第 436 次調査区で検出した東西溝。SD19236 に南半を破壊されているため、溝の幅は不明である。II 期南面築地回廊の北雨落溝 SD3778 の延長部分に位置し、回廊基壇を貫き区画外へ排水していたので

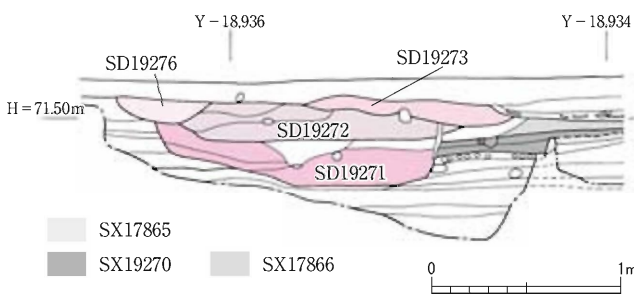


図 147 第 438 次調査区南北溝断面図 1 : 40

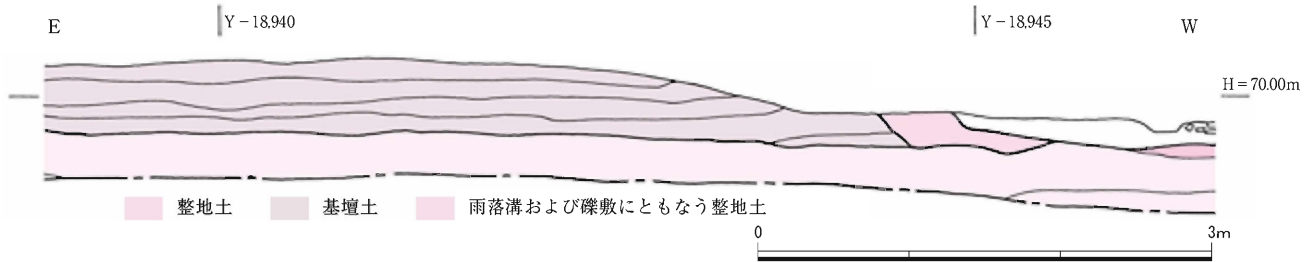


図 148 第 437 次調査区北辺断面図西半 1:50

あろう。溝の埋土中には凝灰岩片が含まれている。
 暗渠 SD19236 第 436 次調査区南で確認した石組暗渠。凝灰岩の底石と側石が一部遺存する。底石の外側に側石が接する構造で、内法で溝の幅は 41cm となる。西面築地回廊 SC13400 を横断して東から西へ排水していたと考えられ、東面築地回廊で検出した東西溝 SD3775 に対応するだろう。SD19235 より新しい。

南北溝 SD19272・19273・19274・19276 SX17866 より掘り込み、SD19271 に重複する南北溝。SD19272・19274・19276 が併存し、SD19272 より新しいが、SD19276・SD19273 より古い (図 147)。いずれも II 期の廃絶から III 期造営までの間に区画内の排水のため掘られたものと思われる。

南北溝 SD14292 第 438 次調査区の東部で検出した南北溝。第 295・305 次調査で検出した SD17863 と同遺構で、その北側の延長部分である。第 295 次調査では I 期の遺構としたが、今回礫敷 SX17866 を掘り込んでいることを確認したため、II 期の遺構とした。溝幅は約 50cm で、南北 18m 分を新たに検出し、全体では 62m 分を確認したこととなる。第 438 次では、この溝と西面築地回廊雨落溝をつなぐ東西方向の短い溝 2 条を確認しており、II 期以降の壇上部分の排水に関わる遺構と考えられる。

SD19226 西面築地回廊東雨落溝の東で検出した南北

溝。上層礫敷を掘込む。幅 60cm の素掘溝で、南北 13.7m 分を確認した。第 432 次検出。

瓦溜まり SX19277 第 438 次調査で検出した回廊西側に広がる瓦溜まり。奈良時代後半の土器や瓦を含み、III 期の遺構 SD19280 に掘り込まれる。II 期築地回廊の解体にともなうものだろう。

III 期

西面築地塀 SA14330・SD19281・暗渠 SD19280 II 期回廊の築地部分のみを踏襲した築地塀。築地本体は残存しないが、第 438 次調査で、基壇東辺を流れる南北溝 SD19281 と、基壇下を貫く暗渠 SD19280 を確認した。

SD19281 は、後述の SD19282 からの排水を南に流す排水溝。南端で西に折れ、SD19280 となる。区画東半の SD8226 に対応するが、SD8226 が長さ約 10.5m であるのに対し、SD19281 は約 6m と短い。西肩に凝灰岩の側石が残存しており、この側石が築地塀基壇の東側外装を兼ねていた場合、I・II 期の築地心で折り返すと、基壇の幅は約 3.9m (13 尺) となる。

SD19280 は殿舎地区内の排水を区画外へ流すための溝で、基壇部分は凝灰岩切石の暗渠とし、基壇より外側は素掘りである (図 149・150)。暗渠部分は底石 4 石

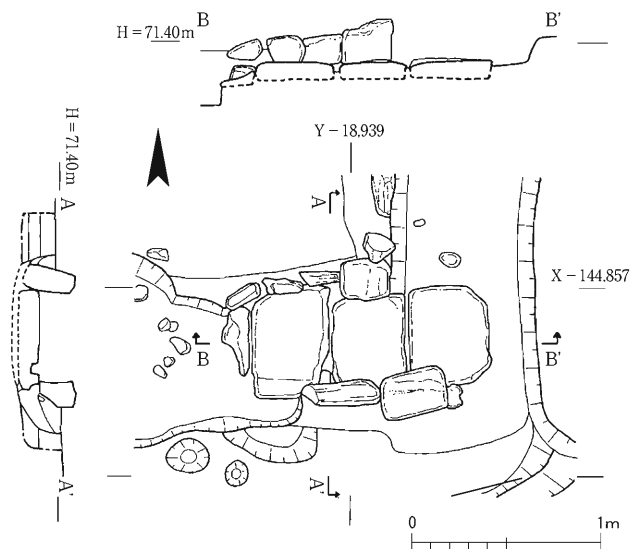


図 149 石組暗渠 SD19280 平面図・断面図・立面図 1:40

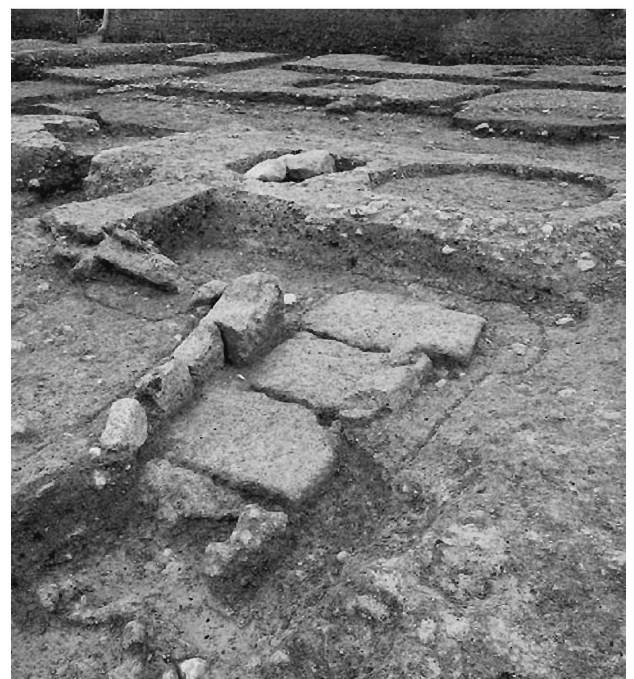


図 150 石組暗渠 SD19280 (南西から)

と側石が一部残存し、溝幅は内法で約40cm。I - 3期 SA13404の柱穴、II期 SX19277を掘り込む。

SA19283 III期殿舎地区を南北に区切る東西塀。掘立柱の柱穴4基を検出した。柱間寸法は約3m(10尺)。掘方は一辺約1mの隅丸方形で、径約30cmの柱痕跡がある。東対称位置のSA8217に対応する。SD19281がもつとも西の1間を通ることから、塀の西端は築地塀に取りつくことがわかる。

SD19282 SA19283の北2mの位置に並行する東西溝。幅約1.2m、深さ約0.2m。東は調査区の外に続き、西はSA14330の手前で南折しSD19281となる。東対称位置のSD6631に対応する。

SA7130 III期広場を南北に区切る東西塀。掘立柱の柱穴3基を検出し、柱間寸法は東が約3m(10尺)、西が約2.4m(8尺)。区画東半で検出した同遺構の西延長部分で、西面築地塀SA14330に取りつく。

SK19237 SC14280の基壇東側に位置し南北方向にのびる土坑。北端は第437次調査区で収束し、南端は第436次調査区まで続いている。最大幅は約3m、深さは10cm~40cmである。土坑埋土からは瓦片、土器片のほか、凝灰岩切石の破片などが多く出土している。この遺構はSC13400の基壇東辺とその東雨落溝SX13401、III期の東西柱列SA7130を壊している。

SK19286・19288 SX17866上面で検出した土坑。埋土より平安時代の緑釉皿が出土した。第438次検出。



図151 SA19283・SD19282(東から)

中世の遺構

井戸 SE19291 第438次調査で検出した直径約3mの素掘り井戸。検出面からの深さは約2.7m。埋土より瓦器が出土した。

時期不明の遺構

瓦廃棄土坑 SK18212 第436次調査で検出した南北に長い土坑。第315次調査で検出した同遺構の延長部分で、北は第217次調査のSK14260へと続き、全体は南北80mにも及ぶ。幅は約4m。多量の瓦や磚を廃棄した土坑で、軒丸瓦6664Cが出土した。遺構の重複関係からSA13404よりも新しい。II期あるいはIII期の遺構と考えられる。

SX19227 第432次調査で検出した矩形の段差で、西辺は築地回廊の基壇東端にほぼ接している。段差の高さは検出面より約20cm。同様の段差は東半の対称位置でも確認されている。大極殿院広場を横断する南落ちの段差とみられるが、性格は不明である。

(森川・和田一之輔/文化庁・今井晃樹・大林)

出土遺物

土器 第432・436・437・438次で出土した土器は整理箱で45箱である。第432・436次では土器の出土量がきわめて少なく、また細片化が著しい。一方、第438次ではII期およびIII期の溝から奈良~平安時代初頭の土器が出土している。土師器の保存状態は概して悪いが、8世紀後半~9世紀初頭のものが多い(図152)。

1・2は、SD19274から出土した土師器。1は杯Aで、外面および底部をヘラケズリしたのち、ヘラミガキを施したもので、口縁端部の巻き込みは小さい。内面には煤が付着し、灯火器として用いられたことがわかる。2は皿Aで、端部を丸くおさめるもの。器表面の大半は剥落し、調整痕をとどめないが、おそらくc手法による。1・2ともに平城宮Vで、II期建物群・溝などの廃絶に関連するとみられる。

3は、土師器碗Cの完形品。口縁部付近にヨコナデ痕を、丸い底部には指頭圧痕をとどめる。器高は小さく皿状を呈する。

SD19280・19282出土土器(4~8)はおもに土師器細片からなり、須恵器は比較的少ない。4はSD19282の土師器皿Aで、器表面の剥落が著しい。5~8はSD19280で出土した土師器で、外面のヘラケズリが特

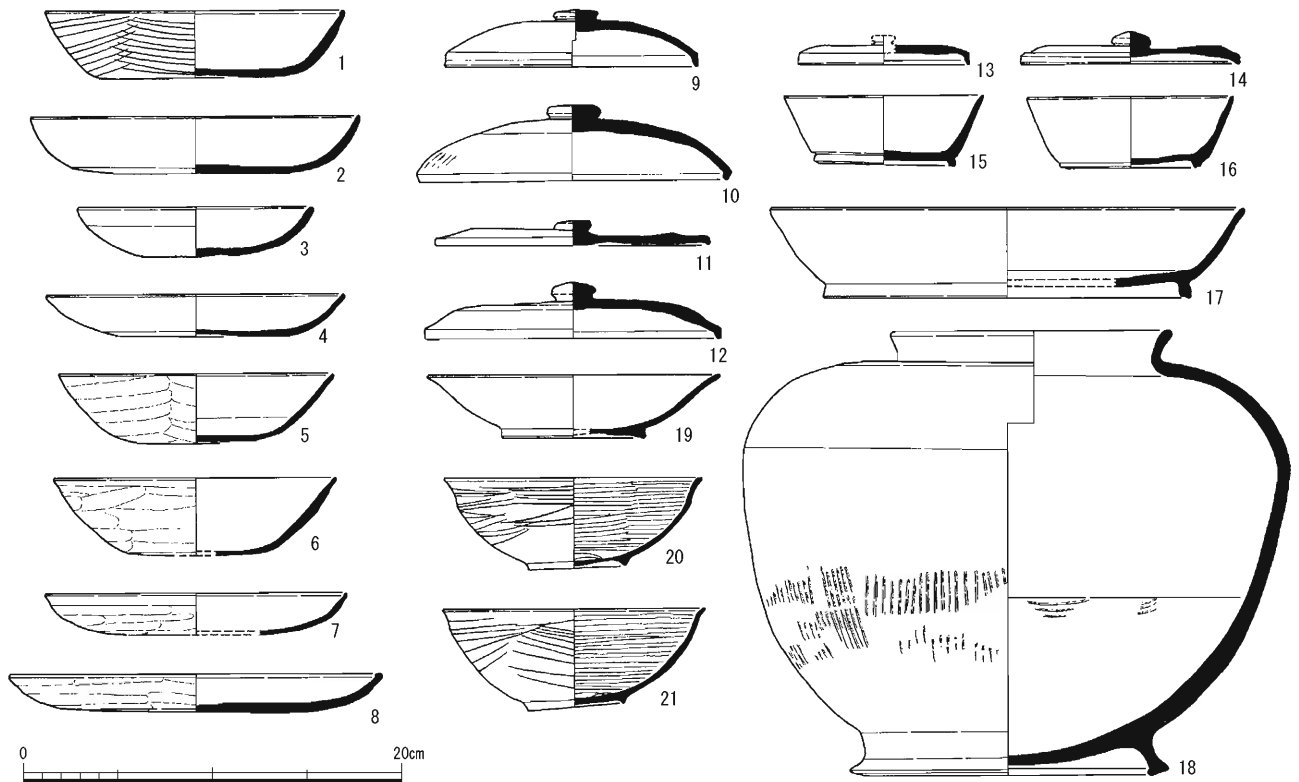


図 152 第 437・438 次調査出土土器 1 : 4

微的である。5・6は杯Aで、前者は完形に復した。ヘラケズリは5単位に分かれており、狭い底部には一方向ケズリを施す。7・8は皿Aで、ヘラケズリで仕上げたもの。8の口縁部にはヨコナデ時のくぼみが削りきれずに残る。平城宮Ⅶ。

9・10は、SA13404の柱抜取穴（第437次）から出土した須恵器杯B蓋。ともに同じ抜取穴から出土したもので、西面掘立柱塀の廃絶時期を示す。いずれも雨傘形をなし、10は頂面にロクロケズリ時の工具痕を残している。平城宮Ⅲ。

11は、SK19287から出土した須恵器杯B蓋。全体に扁平で、特徴ある色調などから猿投窯の産品とみられる。奈良時代後半。

12～17は、SD19276出土の須恵器。12は杯B蓋で、頂面には粘土紐接合痕が消えずに残る。13・14は杯B蓋。14は頂部が扁平で宝珠形のつまみをもつ。15・16は杯B。高台を底部外縁近くに貼りつけるもので、16は灯火器としての使用痕を残す。17は皿B。底部をロクロケズリで整え、高台は底部外縁近くに貼りつける。なお、SD19276の土師器は細片が多いが、外面にヘラミガキを施した杯A片や椀A・皿A片などがある。須恵器と併せ、すべて平城宮土器Ⅴに属すると考えられる。

18は須恵器壺A。胴部径29.0cm、器高23.6cmで、SX19277およびその周辺から分かれて出土。イチジク形をなす胴部と短い頸部とからなり、肩部には降灰と蓋の重ね焼き痕をとどめる。胴部外面はナデで整えるが、下半には並行タタキ目を残す。一方、内面にはナデ痕が残り、火ぶくれを起こしている。

19は緑釉皿で、SK19288とSD19294とに分かれて出土したもの。素地は淡黄白色で、淡緑色の釉薬が一部に残る。削り出し高台をもつ。京都産とみられる。

20・21はSE19291から出土した瓦器椀。内面見込みには螺旋状のヘラミガキを施すが、外面のヘラミガキは粗く、高台は小形で逆三角形をなす。21の底部には「×」印の線刻がある。12世紀後半。

このほか、第432次では築地回廊の基壇を覆うSX19223（赤褐色混礫土）中から磚仏の破片が出土した（図版7）。磚仏片は十二尊連坐磚仏の一部で、釘孔の位置や残存する端部から考えて、三段四列に配した如来坐像のうち左列の下から2段目の像にあたる。如来の像高は34mmで、蓮華座の上に結跏趺坐し左足を前面に見せる。火焰で縁取った二重円の光背を背負い、頭上には垂飾を下ろした天蓋をもつ。像容や像高からみて山田寺出土の十二尊連坐磚仏と同原型品と考えられる。（森川）

表 18 第 432 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6282		1	6646	A	1	熨斗瓦	2
	C	1	6664	C	10	面戸瓦	17
	?	2		K	1	隅切	2
6304		2		?	1		
6316	F	1	6667	C	1		
巴 (中世)		1	6668	A	1		
型式不明		7	6721	G	1		
			奈良軒平		1		
			中世軒平		1		
			近世軒平		1		
			型式不明		12		
軒丸瓦計		15	軒平瓦計		31	道具瓦計	21
			丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	
重量		122.2kg		672.8kg	105.2kg	4.0kg	
点数		2015		16325	145	16	

表 19 第 436 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6133	A	4	6647	B	1	面戸瓦	7
6134	A	1		Ca	1	切熨斗	2
6281	Bb	1	6664	Ca	39	熨斗	9
6284	A	4		?	6	隅切瓦	2
	?	4	6665	A	2	その他	2
型式不明		12	6721	G	1		
			6732	C	2		
			型式不明		27		
軒丸瓦計		26	軒平瓦計		79	道具瓦計	22
			丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	
重量		363.2kg		1974.0kg	95.1kg	57.0kg	
点数		4571		31649	123	302	

瓦 各次数とも第一次大極殿院 I 期の築地回廊の創建瓦 6284C と 6664C の組合せが最も多く出土している (図 153)。そのほか、6133A・B と 6732C の組合せは II 期殿舎地区の東面回廊の瓦であり、6282B・C と 6721C の組合せは、II 期の殿舎地区における所用瓦である。

磚 磚は SA13404 の柱穴から大量に出土している。いずれも掘立柱の礎盤として使用しており、完形品が多い。色調は全体に黒色を呈している。

長方形磚が最も多く出土している。第 432 次調査から第 438 次調査までの 4 調査区で出土した完形品は計 43 点ある。磚の長さは 27.0cm ~ 30.3cm、幅は 1 点だけ 13.3cm の例があるほかは 14.5 ~ 16.9cm、厚さ 7.8 ~ 9.0cm の範囲におさまる。この数値は第一次大極殿院地区で出土している C タイプの磚と一致する。方形磚が 1 点出土しており、長さ 27.0cm、幅 26.8cm である。これは平城宮 A タイプの第一次大極殿院出土の磚と寸法が一致する (渡辺丈彦「平城宮出土磚について」『紀要 2004』)。いずれの磚も第一次大極殿の造営時に規格品として製作されたものであろう。(今井)

銭貨 第 436 次では SC13400 上面の包含層より和同開珎が 2 点出土している。(国武貞克)

表 20 第 437 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6133	B	2	6664	C	10	熨斗瓦	11
6284	A	2		D	1	面戸瓦	16
	C	1		F	1	その他	2
6314	A	1		?	3	平瓦 (刻印)	1
型式不明		8	6685	D	1		
			6691	A	1		
			型式不明		2		
軒丸瓦計		14	軒平瓦計		19	道具瓦計	30
			丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	
重量		237.5kg		930.0kg	222.8kg	5.7kg	
点数		2988		16152	281	72	

表 21 第 438 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6133	Aa	1	6664	C	11	面戸瓦	11
	?	2	6682	A	1	隅切瓦	1
6273	C	1	6721	C	2	へら書き平瓦	1
6282	Ba	1		?	1		
	B	3	6725	B	1		
	C	2	6732	C	7		
	?	2		?	2		
6284	A	3	型式不明		2		
	C	1					
	Eb	1					
	?	2					
6308	B	1					
6311	?	1					
6313	C	1					
6314	A	1					
型式不明		12					
軒丸瓦計		35	軒平瓦計		27	道具瓦計	13
			丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量		182.3kg		684.9kg	52.5kg	64.6kg	0.2kg
点数		2205		13269	80	109	1

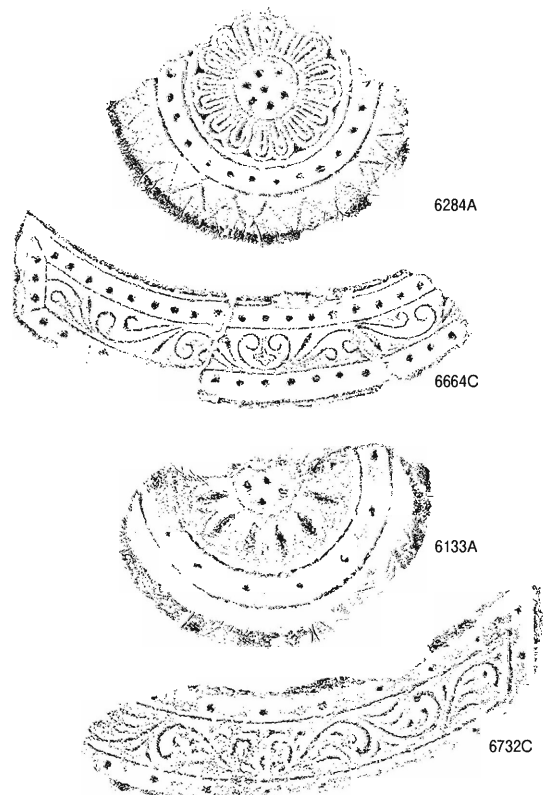


図 153 第 432・436・437・438 次調査出土軒瓦 1:4

5 おわりに

南面築地回廊 南面築地回廊の調査は、第431次調査をもって完了した。以下、この調査の成果を簡単にまとめておこう。

南面築地回廊 SC5600 は、隣接地を含めこれまでに数度にわたる調査を経ており、その構造がおおむね明らかになっていたが、今次調査でも既往の調査とほぼ同じ成果を得た。すなわち、西端を除く大部分で南面築地回廊の基壇は掘込地業をとまなう版築工法によること、建物の柱間は桁行4.6m(15.5尺)等間、梁行約7.1m(24.0尺)であることを再確認した。一方、南面回廊の掘込地業は回廊心の約1.7m幅を掘り残しており、この点で東面築地回廊に似ることが新たに判明した。

SC5600の北側には第一次大極殿院の広場が広がっているが、今次調査ではその一部を調査した。大極殿院広場の下層礫敷 SH6603A と中層礫敷相当層 SH6603B は主として土層観察で認識したもので、後者は東方へと連続しないことが判明した。『平城報告 XI』で示したように、中層礫敷は東楼 SB7802 の増築にかかわるもので、その分布は東西楼の周辺に限られるのであろう。一方、最上層の礫敷 SH6603C は回廊廃絶時の瓦層が直接覆う礫敷面で、瓦層を除去した範囲でその広がりを確認した。これらの層位認識は既往の調査に準じるものである。なお、削平後の基壇を覆う赤褐色礫層 SX19223 は層位的に水田の造成後に敷設されたもので、今次調査ではいわゆるⅡ期礫敷には比定しえないことが明らかとなった。

SC5600の基壇南縁は、後世の削平が著しいものの、基壇縁の推定位置にて基壇外装の抜取溝 SD19217 を検出した。また、朝堂院広場の礫敷の下位では、回廊周辺の排水にかかわる東西溝 SD19220 を確認した。(森川)

西面築地回廊 西面築地回廊は、現行道路以外のすべての部分の調査が終了したこととなる。第432・436次調査では、回廊東側の基壇外装抜取溝と思われる南北溝 SD19225 を確認し、これまで南面回廊より想定されていた西面築地回廊の基壇幅について、新たな知見を得た。

西面築地回廊の東雨落溝 SD13401 も改めて確認し、西面回廊全体で、東肩に拳大の石を並べ、回廊内側の礫敷の見切りとしていることが確認された。

区画内部の舗装の変遷についても新たな成果を得た。

これまで第一次大極殿院の壇上部分については、第295次調査で2時期の礫敷面を確認していたが、今回は合計3時期の礫敷面を確認した。下層の SX17865 は造営当初と考えられる。上層の SX17866 はⅡ期の遺構に掘り込まれていることから、Ⅱ期の造営段階にはすでに敷かれていたことが判明している。問題となるのは、中層の SX19270 の時期であるが、SX19270 が回廊雨落溝を埋め立てていることから、築地回廊を壊し掘立柱塀を造ったⅠ-3期の遺構と考えられる。また SX17866 は、Ⅱ期の造営期に舗装されたのであろう。SX17866 は、SX17865・SX19270 と比較し、径1~4cm という細かな礫を敷く。Ⅱ期は称徳天皇の西宮に比定されており、Ⅰ期の大極殿があった儀式的な空間から生活空間へと変化する。礫敷舗装の変化は、この空間の機能の変化にもなうものと解釈できるだろう。

Ⅰ-3期の掘立柱塀 SA13404 も4つの調査区すべてで確認した。第437次では門 SB19235 を東面掘立柱塀に開く門と対称の位置で検出し、区画が東西対称に計画されていることを再確認した。一方、断割調査をおこなった柱穴では、そのすべてで礎盤として磚を据えており、東面掘立柱塀 SA3777 とは異なる構造で施工されていることが明らかになった。これは、東面回廊の大半が地山を削って整地しているのに対し、西面回廊は低い地山上に大きく盛土をしているためであろう。

Ⅱ期の遺構は、第436次調査で南面築地回廊北雨落溝の西延長部分とみられる暗渠 SD19235 と、第438次調査で築地回廊 SC14280 の礎石痕跡を確認した。

Ⅲ期は、第438次調査で殿舎地区を南北に区画する塀 SA19283 とその北側を流れる溝 SD19282 を確認した。SD19282 は南に折れ SD19281 となるが、これがⅢ期築地 SA14330 の東雨落溝とすると、SA14330 の基壇幅は13尺となる。SD19281 はさらに西に折れ、SA14330 の基壇を貫く暗渠 SD19280 となる。SD19281 とそれに対応する SD8226 の長さは異なるが、Ⅲ期もほぼ東西対称に計画されていることを再確認した。

今後の課題 第432次調査で確認した段差 SX19227 は、東側の対称位置でも同様の遺構を確認している。いずれもその性格は不明であるが、東西対称に計画的に造られた可能性があるため、今後も引き続き調査を継続する必要がある。(大林)